

梅窓院通信

秋彼岸号

No.143

2026/09/01

青山



畳敷きから板張りへと装いを改めた梅窓院2階客殿

住職挨拶

梅窓院第二十五世

中島真成

令和八年も、はや秋彼岸を迎える頃となりました。皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

今回は私が檀信徒さんと地域の方にご参加いただきたいと始めた仏教講座の先生方の話をさせていただきます。



本紙に連載いただいている勝崎裕彦先生と阿川正實先生は梅窓院と同じ浄土宗東京教区の城西組に属する香蓮寺と浄土寺のご住職で、大正大学で教鞭きょうべんを執られていて、勝崎先生は学長も務められていました。阿川先生は中国に留学された経験があり、ご尊父の阿川文正大正大学名誉教授ともご縁があります。

林田康順先生は、大正大学の現副学長で浄土宗の教えの専門家です。慶應義塾大学法学部から大正大学大学院で学ばれ、浄土宗内での研修会や講演はもちろん、宗派をこえて講師を務められている浄土宗を代表する先生です。先のお二人は同じ城西組なので行事等で顔を合わせますが、林田先生は横浜市生麦にある慶岸寺のご住職です。たまたま結婚式の宴席で隣同士となった時に、お忙しい先生とは存じ上げていましたが、思い切った声を掛けたところ、ご快諾いただけました。

本林靖久先生は浄土真宗のご僧侶です。関西在住で、大谷大学、佛教大学、大阪大学で宗教人類学を教えていらつやいます。そして、ヒマラヤ東部のブータンの宗教民俗研究の第一人者です。本林先生とのご縁は実は奥様を通じての出会いでした。

奥様は螺鈿作家で、四階法堂の天井絵を描いていただいております。そのご縁から、一緒にブータンに行ったことがきっかけとなり講座を持ていただきました。

さて、秋に行われる秋彼岸会法要は、二階本堂にて厳修いたします。秋の文化講演会には、以前、梅窓院に籍を置かれていた岡村隆三師に、氣の活用を講演しながらのご講演をお願いいたします。十数年ぶり、二度目の講演となります。ストレス社会に生きている私たちにはとても役立ちますので、どうぞお誘い合わせの上、お越しください。

仙教歳時風物詩(74)

秋到来秋彼岸

新宿区 香蓮寺住職

勝崎 裕彦

40

℃以上の酷暑日の体験は、私自身の生活圏においてはなかったが、「猛暑の夏」は昨年以上であり、酷暑・極暑の言葉を繰り返し使用して、きびしさ、苦しさ、耐えかねるほどの生活ではあった。そして、残暑は長く暑く、はなはだしくきつい。

カレンダーはたしかに九月である。九月と言えば、かつては新涼初秋のさわやかさを快く感じたものである。それが近年はなかなか暑さを通り抜けず、ままならぬ気温の上昇にさいなまれていくわけである。たしかに四季の移り変わりも、旧来の季節感では受け入れがたくなっているようである。

しかし今は九月である。秋の季節はこの残暑のかたわらのどこかに確実にやつてきているのである。秋の到来を身心でしっかりと感じ取ることができるよう、――そう、せめて秋のお彼岸の一週間にはそのような時節として迎え合いたいのである。

かく思い、かく願い、秋の彼岸・後の彼岸時分の佳句を歳時記から拾ってみよう。

もちろん、現在の陽暦九月中・下旬の頃合いを詠んだと思われる例句である。

道元の歩きし道も白露かな (兜子)

二十四節気の処暑(暑さがおさまる)のあと十五日で白露(露が白くかたま

る)となり、秋気をようやく感じる時となる。陽暦では九月七、八日頃であり、今年は七日である。道元禅師の悟道の境地を白露の季語で受けとめた赤尾兜子の句である。

重陽のやさしくなりぬ日のひかり (智恵子)

九月九日は重陽の節句・菊の節句である。冲山智恵子は、健康長寿を願う思いを重ねながら、「やさしくなりぬ」という感謝の気持ちを素直に表明したのである。

菊の香の夜の扉に合掌す (素十)
初菊や拈華微笑の香を今に (昌華)

高野素十と林昌華の句はいずれも菊の香を詠んでいるが、句中に仏教語を置いて、ひとつ、仏心の秋へと誘う情感が込められている。なお「拈華微笑」とは、釈尊が華を拈ったことに対して、大弟子の迦葉尊者が口に笑みを含んで、釈尊の意のあるところを覺ったという故事であり、ここでは仏法の覺りの世界と理解してよい。

秋風の誰か来そふな扉かな (眸子)
一山の清浄即美秋の雨 (風生)

今度は秋の風と雨の句を選んでみた。

秋風(あきかぜ・しゅうふう)は、古来、秋の到来をいちはやく感じ取る言葉であるとともに、心さびしい思いを託する語感があるが、稲田眸子は「誰か来そふな扉」と感じ取ったのである。一方、秋雨(あきさめ・しゅうう)・秋霖は、細かく降る冷たい雨であるが、富安風生は、その降る雨によつて山全体が「清浄即美」、清らかに洗い浄められて美しい、と表現したのである

秋彼岸墓は影もて時を告ぐ (静塔)
秋の日は背にあたたくしづかなり (素逝)

平畑静塔の句は墓影のさまに秋の日の移ろいを見て、長谷川素逝は、秋の日を「あたたくしづか」に背中(ななす)に受けとめて、ともにおだやかに佇むのである。

さてさて、古くからの言い伝えである「暑さの果ても彼岸まで」のことわざを信じて、今、こうして秋のお彼岸を迎えている。たしかに残暑のくたびれも幾分か解消して、秋という自覚が身心にながな生きた中で少しでも積極的に前向きな生き方を求めて、あらためて彼岸念仏を高声に唱和して、まずは身を引き締めて、心を引き締めて、一步一步の歩みを継続したい。

(大正大学名誉教授)

盆施餓鬼会法要

7月13日(月)



郡上おどりin青山法要

6月26日(金)



第92回念仏と法話の会

6月2日(火)

6・7月の

行事報告

ご法要の受付は1階観音堂にてお済ませください。

※祖師堂側からはお入りいただけませんので、ご注意ください。

彼岸寄席

午後1時～ 2階 本堂

秋彼岸会法要

午後2時～ 2階 本堂

※場所や内容が変更になる場合がございます。



令和7年の秋彼岸の様子

三遊亭歌る多 師匠 プロフィール

1962年荒川区生まれ。1981年三遊亭圓歌師匠に入門。1993年女性初の真打ち昇進(女流杵)。2000年女流杵撤廃され、男性と同様の真打ち扱い。寄席・落語の会から、講演会・司会業、コラム執筆など活動の場は幅広い。2010年6月～2024年6月まで落語協会理事・演芸家連合常任理事を務めた。

前座：三遊亭歌ん太

塔婆申込み方法

塔婆回向料…1本/7,000円

●お申込み方法

同封のハガキにご記入の上、9月15日(火)必着でお申込みください。
現在、郵便物の投函から到着までの期間が延びております。塔婆をお申込みの際は、早めのご投函をお願いいたします。
また、直前のお申込みの場合は、お電話でも受け付けておりますので、どうぞご連絡ください。

●お支払い方法

同封の払込取扱票で郵便局にてお支払いいただくか、受付までお持ちください。
銀行・コンビニでのお支払いはできません。
また、払込取扱票に記載の
口座番号 00130-4-93033 はお支払い金額ではございませんので、ご注意ください。

●お塔婆のお渡し

秋彼岸会法要終了後にお渡しいたします。ご欠席の場合は後日、僧侶にて建てさせていただきます。
ご不明な点は梅窓院受付までお問い合わせください。

お檀家様へお願い

- お彼岸前後の土・日・祝日はお参りに来られる方の車で境内が大変混み合います。ご来寺の際は電車等、公共交通機関をご利用ください。
- 9月20日～26日まで、境内駐車スペースは、お体の不自由な方、車椅子をお使いの方の車を優先とさせていただきます。ご協力をお願いいたします。
- 会場内の空調は微調整が難しいため、ご自身で温度調整できる服装でご来寺ください。

秋彼岸会によせて

今回は彼岸についてのお話でございます。

もともと、古代インドの言語(サンスクリット語)に起源を持つ「彼岸」は、「向こう岸に渡ることに到達(彼岸(とうひがん))」を意味します。浄土宗では、「彼岸(かの岸)」は仏の世界である極楽浄土であり、到彼岸は極楽浄土へ至ることをいいます。

さて、皆さんは向こう岸に渡る際、どのような手段を用いるでしょうか。莫大な費用をかけて橋を架ける方、体力を費やして泳がれる方、時間をかけて陸路で遠回りされる方、様々でしょう。

浄土宗を開かれた法然上人は、次のように述べて舟(水路の乗船のたとえ)を用いられます。

ただ弥陀の本願の船に乗りて生の海を渡り、
極楽の岸に着くべきなり

阿弥陀様の本願は、さとりを求める修行者が生きとし生けるもの、みなを救済しようとする誓いです。そして、この修行がお念仏(南無阿弥陀仏)の六字をお称えすることなのです。

前述の法然上人のお言葉は、お念仏という本願の行によって迷いの世界を離れ、極楽の岸(彼岸)にたどり着くことを薦めておられます。しかもその舟は、お念仏という誰もが実践できるありがたい教えなのです。時間も費用も体力のいづれも必要ありません。ただ、心より、阿弥陀様の御名をお称えするだけで、命尽きるその時には大切な方のいらっしゃる極楽浄土へと往き生まれることができるのです。

秋彼岸にはどうぞ、法然上人のありがたいお教えを胸に手を合わせていただき、南無阿弥陀仏……とお称えください。今は亡き大切な人に思いを寄せて、日々をより良く生きる行事としてお迎えいただければ幸いです。

合掌 南無阿弥陀仏
(法務部 琴寄信和)

令和8年度
秋のペット慰霊法要の
お知らせ

梅窓院僧侶がご供養をいたします。ぜひご参列ください。

開式時間：午前11時～ (※例年と開式時間が異なります。)

主催：株式会社ジャパンエキスパートシステム

2階本堂



落語法話に

魅せられて



ただ若麻績大成上人です。

梅窓院で長く続いている行事のひとつに「念仏と法話の会」があります。浄土宗の大切な行である念仏を皆さんと一緒にお称えし、梅窓院とご縁のあるお坊さんの法話を聞く会です。いわば浄土宗ならではの大切な行事です。

今年度法話をいただく若麻績大成上人に落語法話について伺いました。

お笑い芸人を目指したお坊さん

「私の将来の夢は、お笑い芸人になることでした」と話を始めてくれたのは今年度の念仏と法話の会でお話しい

昨年三月まで梅窓院の法務部に所属されていた信州善光寺の門前にあるお寺、浄願坊のお坊さんですが、大学時代から梅窓院のお手伝いをされ始め、通算十三年間、法要やお葬儀はもちろん、お坊さんのいろいろな仕事をされてきました。その個性的なキャラクター、とても人懐っこく優しいお坊さんですので、覚えていらっしゃる方や、お世話になりました、という読者の方も多いか

と思います。

その若麻績上人は浄願坊の次男だったこともあり、高校を卒業してお坊さんの道に入るも、コメディアンになりたくてワタナベエンターテインメントのコメディスクールに2年間通われました。しかし、なかなか芽が出ないこともあり、芸人の道

を諦め、お坊さんの道に戻られました。再び大学に戻り通いながら、土日に梅窓院でお手伝いを始められたそうです。

青山での落語との出会い

そして卒業後に正式に梅窓院に入ったところ、近くに桂幸丸師匠の落語教室があることを知ったそうです。若麻績上人は落語と聞いて思い出すのが、育った信州善光寺のお血脈を素材にした石川五右衛門が出てくる古典落語でした。そこで落語もいいな、とこの教室に通うことになりました。

お笑いと言語は別物でしたが、そんな折、若麻績上人が落語を法話に取り入れようとした動機となった言葉に出会ったそうです。

落語は人間の業の肯定

その言葉とは嘯家立川談志師匠の「落語は人間の業の肯定」という言葉でした。その言葉を知り、若麻績上人は気付かれたそうです。

「仏教の教えは業を抑えること。業とはわかりやすく言えば、煩惱とか欲望です。そしてこの煩惱や欲望が元となり、人との間で争い事が起きます。ですが、浄土宗の教えは、そうした煩惱や欲望を捨て切れないのが私たち人間だとします。

この教えは、まさに談志師匠の言う、人間の業（煩惱）の肯定に通じます。そして、こうした業と縁の切れない人間を浄土宗では、凡夫とか愚者と言います。

そして、この凡夫や愚者を救ってくれるのが、阿弥陀様。ですから、阿弥陀様にお願ひし、極樂浄土にお迎えいただけるようにと念仏を称えるのです。そして極樂浄土に往生した後に、業と縁を切り、仏になる道に励むのです」

「私は大本山増上寺の布教師会に

入って、浄土宗の教えとその伝え方を学んでいます。そこで教わる凡夫や愚者という言葉を使うよりも、それを落語に置き換えて話す方が、よりわかりやすいのではと落語法話を考えたのです」

何度も同じミスを繰り返したり、人



6月2日の「念仏と法話の会」で落語法話をされる若麻績大成上人。

を騙したり、自分勝手であらしない熊さんや八つっあん、これこそが私たちの本当の姿ということを落語を通して伝えよう、というのが若麻績上人の落語法話の原点、ということです。

今回は「まんじゅう怖い」

と言うことで、最初の法話では「まんじゅう怖い」を法話の途中で一席披露されました。

皆さんご存知かもしれませんが、怖い怖いといつて大好きな饅頭を食べてしまう落語ですが、まさに食べたいと言う人間の欲望に気付かされる噺です。

「途中で落語を一席入れるのは、長時間にわたって仏教の教えを聞き続けるのが大変だからです。私自身も苦手ですから落語を挟むことで聞きやすくもなるのではないかと思います」

来年は善光寺のご開帳

さて、若麻績上人は昨年四月から、德行坊という信州善光寺の門前のお寺の住職を務められ、善光寺の一員として活躍されています。来年、その善

光寺が一光三尊阿弥陀如来という善光寺ならではの「ご本尊のお前立ち」がご開帳されます。七年に一度という大変貴重な行事です。梅窓院でも二回前のご開帳に団体参拝しています。来年の団体参拝の予定はありませんが、ぜひ、皆さんご参拝ください。

最後に若麻績上人から皆さんへこんなメッセージです。

「学生時代から梅窓院の檀信徒の皆さまとお付き合いをさせていただき、本当に色々なことを教えていただきました。

今日は迎える側ではなく、お話しさせていただく立場なので、かなり緊張しているのですが、昔お付き合いあった檀家さんのお顔を見て、ご挨拶をいただいたことで緊張が解けました。

まだ、これから二度の「念仏と法話の会」でお話しさせていただきますので、どうぞお足を運んでいただき、懐かしいお顔を拝見させてください」

若麻績上人の落語法話が聞けるのは、

令和八年十月二十二日と

令和九年二月二十六日です。

どうぞお楽しみに。

囲む人々の岐阜県郡上八幡シリーズの最後は、明治16年創業の名水の宿・吉田屋、そして併設のうなぎ屋・美濃錦の社長でいらっしゃいます。さんにご登場いただきました。

社長は6年前から郡上八幡観光協会の会長も務めていらっしゃいます。そんな さんにお話を伺いました。

◆本日はよろしくお願ひいたします。 会長が経営する吉田屋さんは郡上八幡を代表する宿屋さんで、いつも梅窓院もお世話になっています。

会長(以下) いいえ、こちらこそお世話になっています。

◆ 会長は、郡上八幡生まれの郡上八幡育ち、でしょうか。

はい、生まれはここですが、次男だったこともあり、西洋料理、当時はまだイタリア料理はない頃でしたが、フランス料理のシェフを目指して4年間東京で修行しました。その後、名古屋でお店を探したのですが、いいお店がなくて、父からそれなら宿屋を手伝ってくれと言われて、戻りました。

◆それをきっかけに吉田屋さんを継がれたのですか。

いいえ、兄が日本料理を勉強していて、吉田屋を継ぐ予定だったのですが、突然、本当に突然、カナダに住みたいと日本を離れてしまったので、私が仕方なく継ぎました(笑)。

◆何かドラマチックですね。

当初はかなり戸惑いましたが、今は楽しく宿屋とうなぎ屋をやっています(笑)。

◆続いて観光協会会長として伺いたいのですが、会長が目指す理想の郡上八幡の観光をお教えください。

一言でいうと、「住みたい町」です。京都をはじめとする歴史的建造物や東京や大阪などの商業施設や観光施設で人を集める観光地ではなく、自然と共に暮らす人々に魅了されて、何度も訪れてくれる観光地が理想です。

◆一般的な観光地ではないのですね。

もちろん、郡上踊りがありますが、盆踊りですから、どうしても季節に限られます。それに加え、四季を通じて訪れてくれる町にしたいですね。

ちなみに、俳優の近藤正臣さんをご存知ですか。

◆はい、存じております。

近藤さんは30年ぐらい前に郡上八幡に釣りをしに来られました。吉田屋にも何度も泊まれ、懇意にさせてもらっていますが、郡上八幡が気に入られて、別荘を建てられました。そして10年ぐらい前にこちらに移住されました。

◆移住されたのですか。

はい。ご存知のように、本当に町中、役所の前、宿屋の前、店屋の前、住まいの前に綺麗な川が流れている。そしてその周りには緑豊かな山々が広がっている。近藤さんは「日本にもまだこんな自然豊かな町が残っているのか」ととても気に入られたのです。



旅館1階にある「吉田屋美濃錦」の看板前で、終始和やかな様子を見せる中島住職と 会長。

◆確かに、郡上を流れる川の透明感は特別だと思います。

この自然を見せたいと、近藤さんは、浅丘ルリ子さんと石川さゆりさんを連れて来られましたよ。

◆本当に気に入られたのですね。

ですから、私の目指す観光とは、大勢の観光客が土足で入ってくるのではなく、木の陰や柱の陰から、人々の生活を見たり、散歩しながら川の流れるを楽しんだり、水の音に耳を傾けたり、昔から続く普通のお店屋さんのお菓子を食べたり、郷土料理を味わったり、といった今ある町並みや日々の暮らし、豊かな自然に静かに身を委ねる観光ですね。

◆なるほど、そのようなお考えなのですね。

今は全国どこもシャッター街ばかりですが、幸い郡上八幡ではシャッターは閉まっていません。それは大都市から離れていることが大きな理由になります。ここ郡上八幡は名古屋にしろ、富山にしろ、2時間半もかかる陸の孤島なのです。

◆そう言う意味で地理的に恵まれている。

そうですね。生活の全てがこの郡上八幡で済ませられますからね。そう言う意味で、私の目指す観光地にふさわしいのが、ここなのです。

◆会長の目指す観光はここ郡上八幡だからこそその観光なのですね。今日はありがとうございました。



老舗旅館「吉田屋」の趣深い中庭にて。

プロフィール

昭和32年生まれ。郡上八幡で144年続く老舗旅館と日本料理屋の四代目。令和2年から郡上八幡観光協会の会長を務めている。

青山散歩道

鯨つきうだ

今回は、東急東横線中目黒駅および東急田園都市線池尻大橋駅から徒歩約10分の場所にある、「鯨つきうだ」をご紹介します。

大将の月生田光彦様は、もともと料理の道へ進むことを考えていたわけではなく、小学生の頃から野球に打ち込み、甲子園を目指していた野球少年でした。



木の香りと共に純和風の清潔感ある店内。

月生田様が鯨の道を志したのは高校卒業後。幼い頃から寿司が好きだったこともあり、自分の好きなことを仕事にした方が長く続けられると考え、この世界へ飛び込みました。

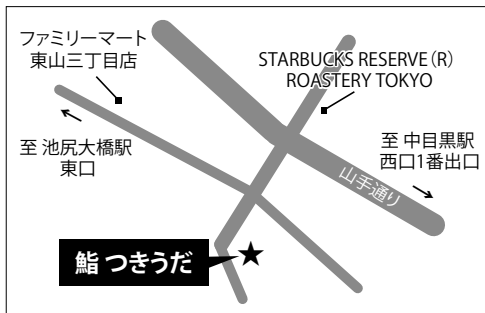
「鯨つきうだ」を開店するまで、鯨店はもちろん、大衆居酒屋などさまざまな店舗で修業を重ねてき

ました。その経験の中で、寿司職人として技術や知識を持つことは当然であり、本当にお店の良し悪しを決めるのはお客様である。お客様に「良い店だ」と思っていたくためには、人間性を磨くことが大切と考えるようになったといいます。

そんな月生田様が語る「鯨つきうだ」の特徴は、まさに「人間力」です。お客様とのつながりを大切にし、心を込めたおもてなしを続けてきた同店は、本年9月に開店10周年を迎えます。

もちろんスタッフの皆様も培ってきた人間力を大切にして、多くのお客様に喜んでいただけるお店づくりを続けています。

明るく朗らかな人柄が魅力の月生田様が握る鯨を味わいに、ぜひ一度「鯨つきうだ」へ足を運んでみてはいかがでしょうか。



営業時間／
月曜日～土曜日…ランチ 12:00～
ディナー 18:00～/20:30～
(二部制)
日曜日…ランチ 12:00～
ディナー 17:00～/19:30～
(二部制)

定休日／不定休 ※完全予約制
※最新情報は店舗まで直接お問い合わせください。
席数／8席(個室あり 5名まで可能)
住所／東京都目黒区東山1-11-15
中目黒ARKIIビル 1F
TEL／03-6303-1733



昼コースの握り8品。こちらに加えて、おつまみ4品・焼き物1品・巻物・お椀がお楽しみいただけます。

あの世があるから この世が楽しい

帯津良一



3

医療と医学

私が中国医学と西洋医学を合わせた、いわゆる中西医结合によるがん治療を旗印に掲げた病院を郷里の川越市に開いたのが一九八二年の十一月。時々、大きな専門病院から患者さんがやって来るのです。「どうしましたか?」

「主治医さんに診療を拒否されたので、やって来ました」

「……どういことですか?」
「私が抗がん剤をお断りしたら、もう、うちの病院に来ないでくれ!と言われたのです……」

愕然としました。こんなことでは治る病氣も治らなくなるのではないかと。たしかに当時は医療者の間でも医療と医学とが混同されていました。だから医療の真ん中に医学がでんと坐ってしまい、エビデンス!エビデンス!という叫び声(こゝろごゑ)が溢(あふ)っていました。

さすがに最近では医療と医学の違いが歴然として来ました。医療が戦いの最前線なら、医学は後方に在って、最前線が必要とする武器弾薬や食糧を届ける兵站部(へいたんぶ)、今風に言えばロジスティックスです。兵站部は最前線の要求に応えるべく、常に秀れた武器弾薬を豊富に保持していなければなりません。これを支えるのは科学の知です。

一方、最前線は科学の知だけで勝利を収めるわけにはいきません。將軍の直観と決断。参謀本部の作戦と用兵。兵士の能力と勇敢などが一体となつての勝利です。科学の知に対して、これを「臨床の知」と名付けたのは哲学者の中村雄二郎先生です。(『臨床の知とは何か』岩波新書)

彼によれば、科学の知を支えるのは
①普遍主義…事物や自然を基本的に等質的なものと見なすことによつてすべてが量的なものに還元される

②論理主義…すべてが論理的な一義的因果関係によつて成り立っているとする立場

③客観主義…扱う者の側の主観性を排除であるのに対し、臨床の知を支えるのは、
①コスモロジー…場所や空間を無性格な均質的なものではなく意味をもつたものと見なす

②シンボリズム…物を多義的に捉える
③パフォーマンズ…行為する当人とそこに立ち合う人の間に相互作用が成立している

ということなのです。

一回読んだだけではわかりませんが、何回も読んでいくうちにわかつて来ます。端的に言えば、医療とは患者さんと治療者が寄り添い合うことなのです。それも上から目線を捨てて、互に戦友として寄り添い合うのです。

梅窓院からのお知らせ

浄土宗新聞の 同封内容変更につきまして

2026年より、寺報『青山』の発行回数を変更したことに伴い、これまで『青山』に同封しておりました『浄土宗新聞』の送付につきましても変更させていただきます。
今後は、3月号・6月号・9月号・10月号を除いてお届けいたします。
何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

行事予定

秋彼岸会法要

9月23日(水・祝)

寄席 午後1時～ 本堂

法要 午後2時～ 本堂

※詳しくは3面をご覧ください。

第93回 念仏と法話の会

10月22日(木)

13時(受付開始12時30分) 観音堂

講師 長野県長野市 善光寺山内

徳行坊 住職

若麻績大成 上人

※詳しくは別紙チラシをご覧ください。

第19回文化講演会

11月21日(土)

「生老病死における氣の活用法」



講師 岡村 隆二

場所 祖師堂

開演 14時～

※開場は13時15分～

※詳しくは別紙チラシをご覧ください。

発行 梅窓院
発行日 令和8年9月1日
発行人 中島 真成
編集 広報部
住所 〒107-0062
東京都港区南青山2-26-38
電話 03-3404-8447
FAX 03-3404-8107
ホームページ <https://www.baisouin.or.jp/>
E-Mail jodo@baisouin.or.jp
題字 中村康隆元浄土門主
総本山知恩院第八十六世門跡

梅窓院のお墓とペット供養の窓口

ジャパンエキスパートシステム 墓苑事業部からのお知らせ

もう秋のお彼岸のお話の時季になりました。次はお正月の話ですよ。早いものです。

先日、夏の暑い時の休憩所で結構多くの方がおられた際の話です。年配の方が若い方のイヤホンを見て「まあ！お若いのに補聴器使っているの？」と仰って周りの皆さん大笑い。お連れの方が「あれは音楽とか聴いているのよ」と話したら「よいわね、私も同じのにしようかしら」。イヤホンの方が「今度お教えしますね」と優しいお気遣いをいただき、とても和やかな時間が流れました。

お墓参りは色々な年代の方が見えるので、このような会話で皆さん癒されますね。

さて、お墓の汚れや雑草でお困りの方がおられましたらお早目にお知らせください。代参や代行作業のことが認知されてきたこともあり、かなり件数が増えてまいりました。今くらいの時が1番お問い合わせが多いです。

また秋彼岸のペットちゃんの法要の開始時間が1時間早まりましたので、ご参列予定の方はお間違えのないようお越しください。

墓苑事業部 森

梅窓院墓苑代行作業のご案内

代行作業内容	料金
草むしり	3,300円～
墓石洗い(水での手洗い)	3,300円～
植木手入れ(伐採や剪定)	3,300円～
代参	2,200円+香花代

備考

※表内の料金は最低料金となります。表以外の作業も承りますのでご相談ください。
※作業日は土日と行事前を除き、また指定できません。ご依頼は原則としてお施主様からお願いします。

※年間契約もできますので、ご相談ください。
ご相談電話番号 03-3404-1230

お檀家さんに伺いました

令和8年 春彼岸会にて

『ご縁に導かれて』

毎年、春と秋のお彼岸に参加させていただいております。

梅窓院とのご縁は、昔、梅窓院の広告を見た母が、青山の地にゆかりがあったこともあり「こんなお墓に入りたい」と呟いた時から始まりました。しかし、その会話を最後に母は病に倒れ、帰らぬ人となりました。母の言葉が遺言のように感じられ、また 義父がお墓を持っていなかったことから、両家のお墓を持つことになり、梅窓院とのご縁をいただきました。

お参りしたいと思った時にすぐ足を運ぶことができ、とても助かっております。また、父が亡くなった際には、ご僧侶に親身に寄り添っていただきました。お心遣いやお言葉が大変ありがたく、涙がこぼれるほど嬉しかったことを今でも覚えています。梅窓院にはいつも深く感謝しております。

～音の花コンサートのお知らせ～

フルートとハープの優しい音色でお届けするお1人様でも気軽にお楽しみいただけるコンサートです。心安らぐひとときをお過ごしください。

日時: 令和8年11月14日(土)

時間: 14:45開場 15:00開演(演奏時間約1時間)

会場: 梅窓院 地下1階 講堂

定員: 先着30名(10/1より受付開始)

入場料: 2,500円

問い合わせ・申し込み: 080-5183-7373 浅野

※梅窓院主催ではございません。

